国内最大規模！弥生時代の門柱跡を発見！

１．今回発表する調査成果の概要

野洲市妙光寺地先に所在する中畑・古里遺跡で、このたび国内最大規模となる弥生時代中期末（紀元前後／約 2,000 年前）の門柱跡がみつかりました。令和８年（2026 年）６月１日に記者発表を行い、報道等でも大きく取り上げられた、弥生時代中期末の大型掘立柱建物跡（以下、「大型建物跡」とします。）と同時期の門柱跡と考えられます。また、柱穴規模が非常に大きく、弥生時代の門柱遺構としては国内においても最大規模となります。

２．弥生時代の門柱跡

門柱跡は、調査区Ｂ区（滋賀県文化財保護協会調査区）の南西部で一対（柱穴２基）が見つかりました。調査区北端部で以前見つかっていた大型建物跡の中心部から、南西に約 55m離れた地点に位置します。門柱跡から南東に 3～5m離れた位置が地形の傾斜変換点となり、大型建物跡と同様に微高地の縁辺部に立地しています。柱穴内から出土した土器の特徴によって、弥生時代中期末（紀元前後／約 2,000 年前）の門柱跡と判断しました。

【規模と構造】

位置関係等から、柱穴２基（門柱１・門柱２）が対をなします。２基の柱穴は互いに近い側が最も深くなることから２基一対とみられ、門柱であった可能性が考えられます。以下に記載する最深部で検出された柱痕跡とみられる窪みから柱間距離を復元すると、約 8.3mとなります。それぞれの柱穴の規模や構造は以下のとおりです。

門柱１：短軸約 1.4m、長軸約 3.9mの平面隅丸長方形を呈します。深さは最深部で約 1.5mを測ります。長軸の断面形状は、南西から北東に向かって底面がスロープ状に傾斜し、北東端が最も深くなります。最深部では底面に直径約 0.45mの窪みが認められ、柱が位置していた部分の痕跡と考えられます。柱材そのものは残っていませんでした。

門柱２：短軸約 1.5m、長軸約 4.1mの平面隅丸長方形を基調としますが、北東隅部は東にやや広がります。深さは最深部で約 1.4mを測ります。長軸の断面形状は、北東から南西に向かって底面がスロープ状に傾斜し、南西端が最も深くなります。こちらも最深部では底面に直径約 0.35mの窪みが認められ、柱が位置していた部分の痕跡と考えられます。柱材そのものは残っていませんでした。

【門柱の時期】

出土した土器は多くはありませんが、その特徴から、弥生時代中期末（紀元前後／約 2,000 年前）のものと考えられます。大型建物跡と同時期の遺構と判断されます。

【柱穴構造の大型建物との共通点】

今回発見された門柱柱穴は、いずれの掘方も外側が浅く、内側に向かって傾斜しています。大型建物跡の桁行側柱の掘方形状と同じ、特徴的な斜路構造をもっています。柱を立てる際に外側から斜路（スロープ）を利用して柱を落とし込み、そして引き起こして立てたと想定されます。

【上部構造】

柱材が残っていないため、上部構造は不明です。２本の立柱のみであった可能性があります。

【近接地の遺構】

門柱１の西側には、平面形状が門柱と類似する土坑がみつかっています。深さ約 0.8mを測りますが、掘方の形状に斜路構造はなく、底面は中央部がやや深くなる舟底状を呈します。同時期の遺構であった可能性はありますが、遺物はほとんど出土しておらず、時期の特定はできませんでした。

門柱２の西側には祭祀土坑（祭祀に使用されたとみられる大型壺等が出土した土坑）があります。平面形は不整方形を呈し、深さ約 0.2mを測ります。門柱跡や大型建物跡と同時期の遺構ですが、底面に斜路構造や柱穴等は認められません。

また、門柱から約27m東側では、竪穴建物跡が2棟みつかりました。いずれも出土遺物は少なく、住居跡というよりは、大型建物等の管理施設のような性格であったと推測されます。

【門柱の性格】

今回の調査地付近は集落居住域からは離れた地点と考えられ、当該期の主だった建築物としては大型建物と門柱が際立つかたちで存在していたとみられます。微高地縁辺部の傾斜変換点には立地していますが、周囲に区画となるような柵や溝などは確認されませんでした。また、門柱間の中心線を南東軸方向に延長した先は、三上山と手前の妙光寺山の山間谷部にあたります。微高地の内部は広場のような祭祀空間となり、門柱は祭祀空間を外側と画す、象徴的なモニュメントとして立てられていた可能性もあります。

３．他事例との比較

門柱状の遺構は、滋賀県ではこれまでに史跡下之郷遺跡（守山市）や下鈎遺跡（栗東市）でみつかっています。下之郷遺跡では、弥生時代中期の大規模環濠集落を囲う三重の環濠のうち、最も内側にある環濠の陸橋部分（出入口）でみつかっていて、集落への出入口と考えられています。下鈎遺跡では、弥生時代後期後半の「伊勢型」大型建物から約70m離れた位置でみつかっています。柱間距離は約3.9mで、柱穴の規模は、短軸約0.6m、長軸約0.9m、深さ約0.65mのものと、短軸約0.7m、長軸約0.85m、深さ約0.8mのものがあります。両柱穴には直径40㎝程度の柱材が残っていて、柱穴掘方に傾斜面を有します。また、門柱に付随する柵列や溝・濠はありません。

中畑・古里遺跡でみつかった門柱跡は弥生時代中期末のもので、下之郷遺跡や下鈎遺跡の事例とは時期が異なります。下之郷遺跡例は集落の出入口として築かれていることから、性格も異なります。下鈎遺跡例とは共通点が多く、大型建物に伴っており、柱穴掘方に傾斜面があることや、区画をする柵列や溝が伴わないことは共通点といえます。しかし、門柱の規模については、下鈎遺跡例をはるかに凌駕する大きさとなります。

巨大な柱を立てたと考えられる事例は、北部九州で20例近くが確認されています。立石遺跡（福岡県春日市）では、墳墓群に伴って平面隅丸楕円形を呈する大柱遺構が検出されています。1号大柱遺構は、短軸1.5m、長軸4.7m、深さ2.1mの規模で、片側から階段状に掘り込み、反対側の端部付近が最も深くなる断面形状となります。3号大柱遺構は、短軸1.1m、長軸6.2m以上、深さ2.3mの規模で、片側から緩やかに傾斜し、反対側の端部付近では急激に段差がつく断面形状です。いずれも出土遺物から、弥生時代後期の遺構と報告されています。

中畑・古里遺跡の門柱跡との共通点は、規模が極めて大きく、かつ、長軸の断面形状がスロープ状に傾斜して、一方が最も深くなる点です。巨大な柱を立てる際に、柱を落とし込んで立てるという合理的な構造とみられます。一方、相違点は2基一対の門状にはならず、1本のみが立柱として立てられている点です。立石遺跡例では大柱を立てたあと、何らかの契機で柱を抜き取って、朱や土器（高坏・器台・壺）、鉄斧、銅剣を投棄しており、大柱が墓前祭祀に伴う聖域のメルクマールとしての役割を果たしていたとの見解もあります（註1）。

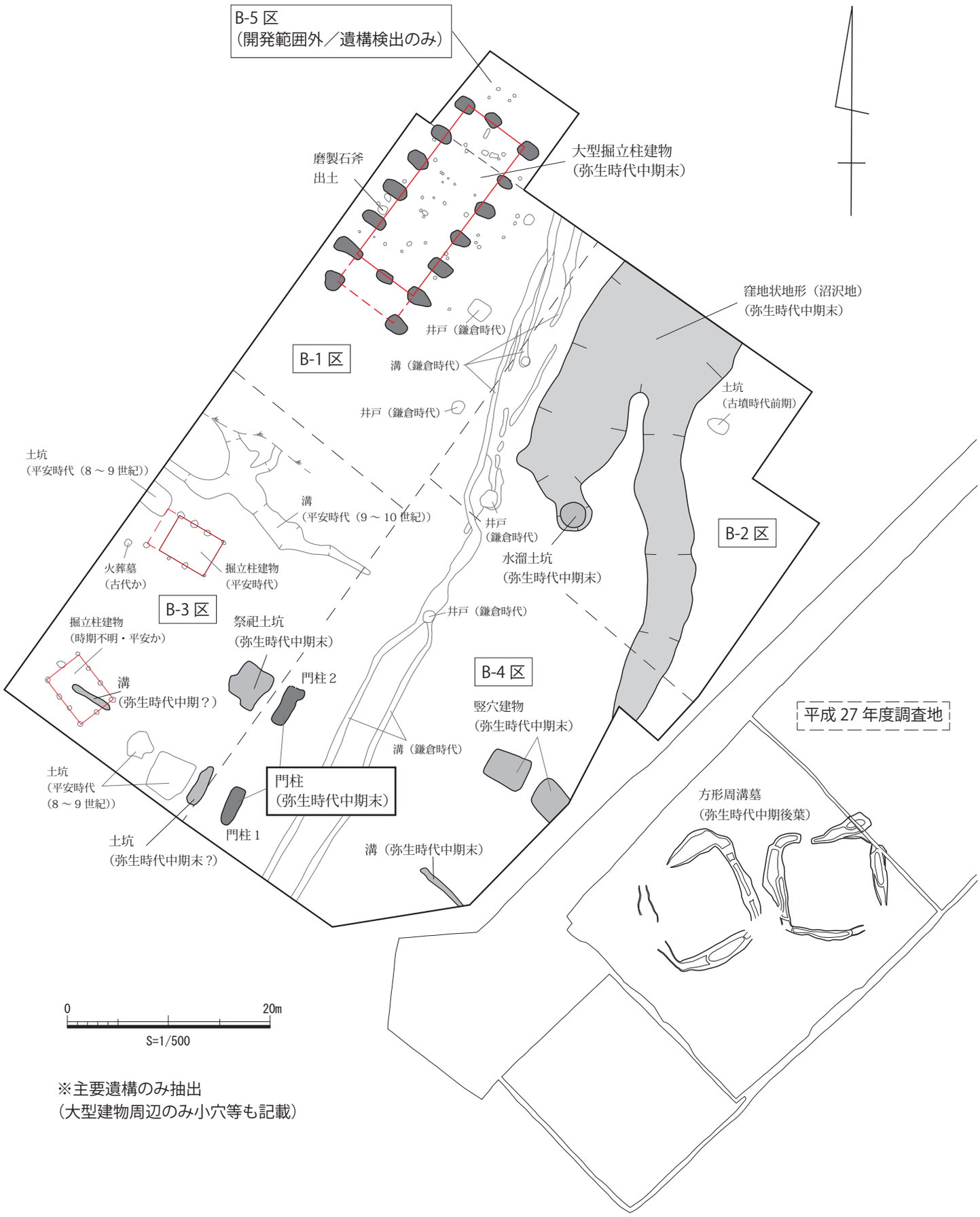
４．まとめ

今回の発掘調査によって得られた成果は、以下のようにまとめることができます。

① 今回見つかった門柱跡（弥生時代中期末）は、弥生時代の「門柱」としては国内最大規模の事例となる。

② 集落祭祀に伴う構築物として、大型建物とともに象徴的に築かれたことが想定される。

註1）境 靖紀（2001）「弥生時代大柱祭祀の一例 －春日市立石遺跡の検討－」『古文化談叢』第47集



※主要遺構のみ抽出
（大型建物周辺のみ小穴等も記載）

中畑・古里遺跡　B 区（県協会調査分）　主要遺構配置図

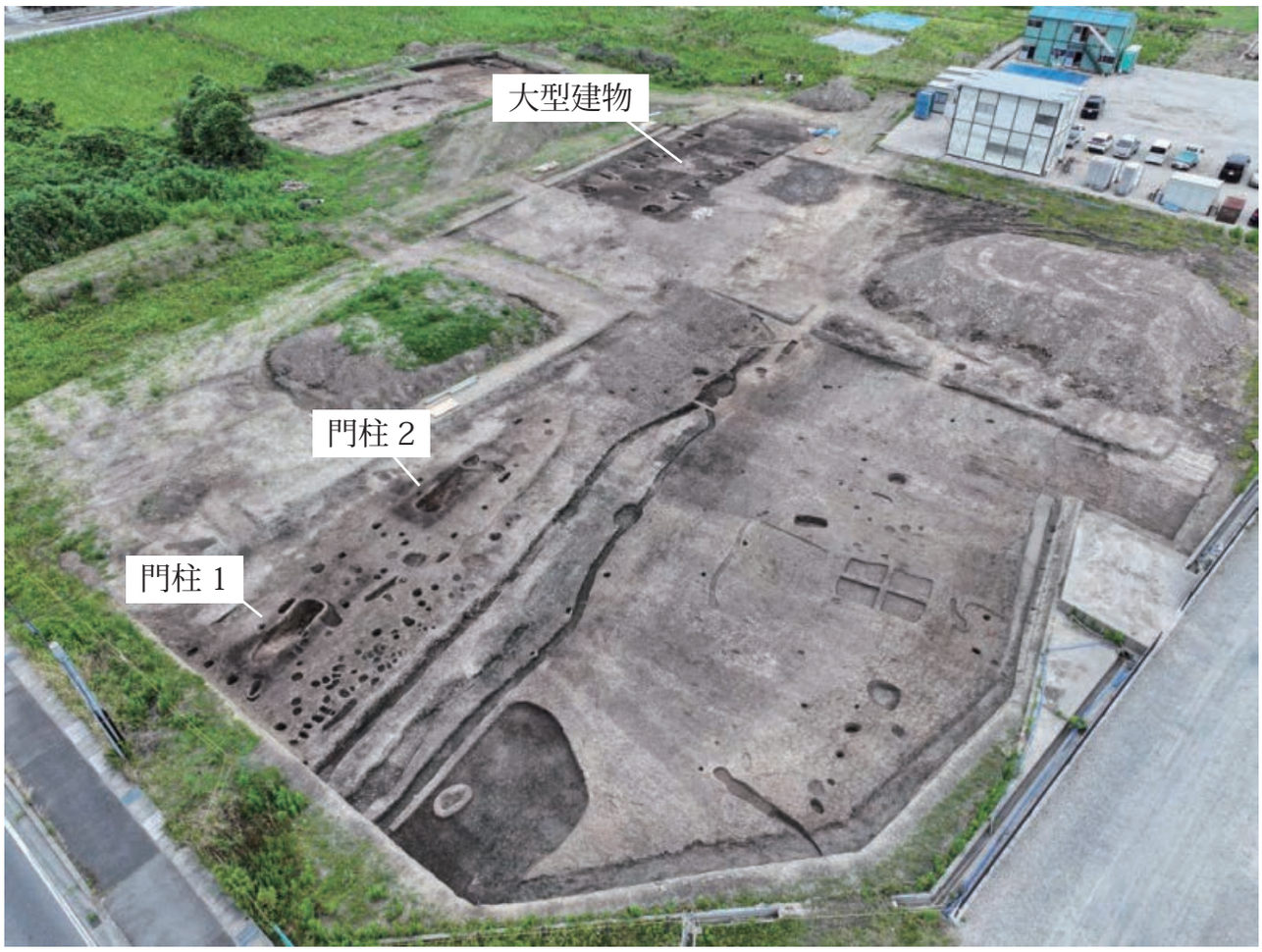


写真１　調査地遠景（南から）

写真２　調査地全景（北西から）

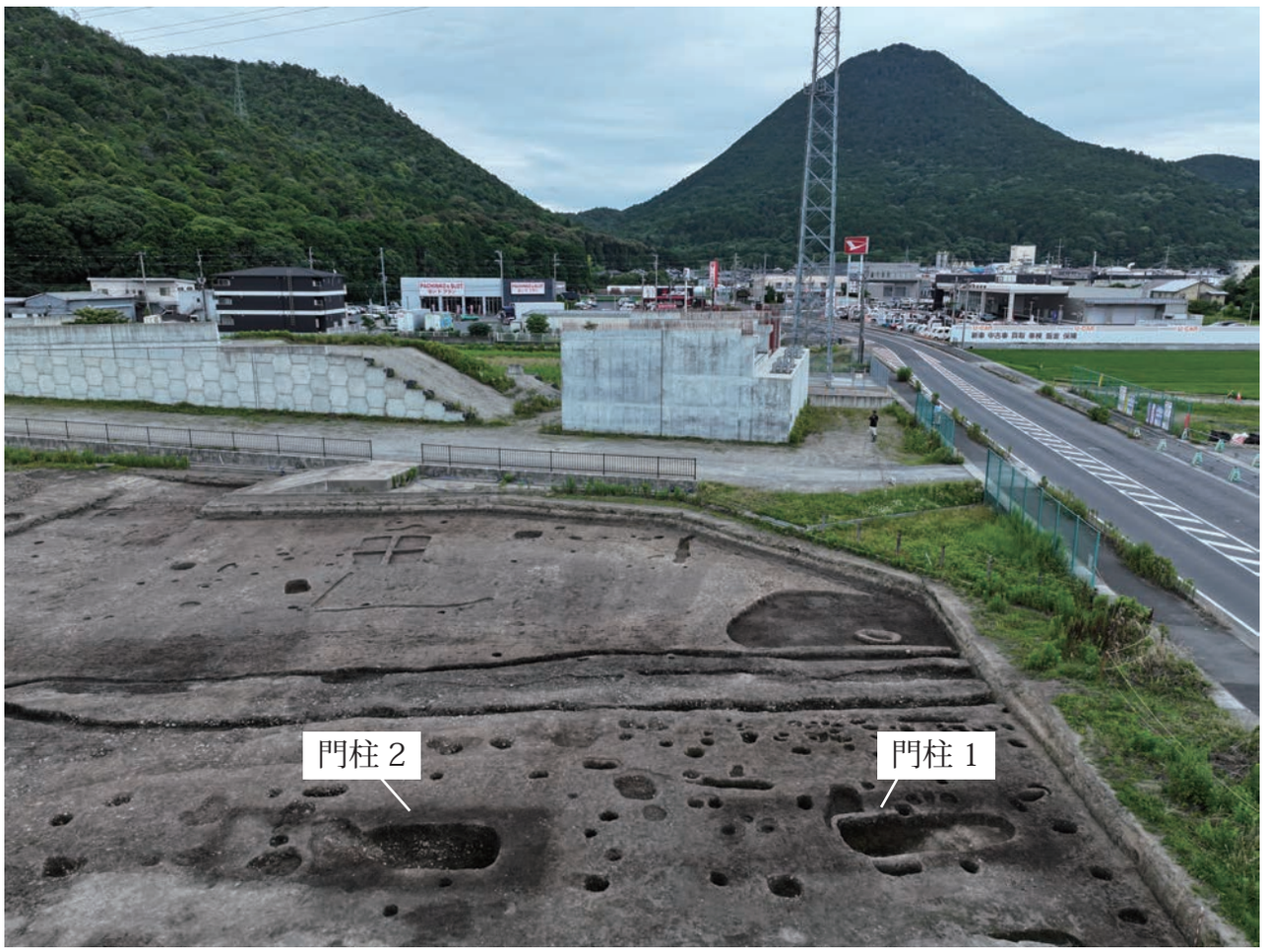


写真３　門柱跡遠景（北西から）

写真４　門柱跡（北西から）

写真５　門柱１（南西から）

写真６　門柱１近景（南から）

写真７　門柱２（北東から）

写真８　門柱２近景（北から）